



## ろく 呂久の渡し

1 / 9



明治24年ごろの呂久川

揖斐川は、享禄3年（1530）の大洪水によって大きく流路が変わりました。  
大垣へ流れていた杭瀬川と、長良川に流れていた糸貫川が合流して一つになり、  
川幅を狭くしながら呂久の西を蛇行して流れるようになりました。  
以来この地域は毎年水害に悩まされながら、先祖から受け継いだ田畑を耕しつつ、  
地の利を生かした水運に携わる人が増えてきました。



## ろく 呂久の渡し

2/9



〔五海道其外延絵図中山道巻第9〕東京国立博物館所蔵

戦国時代、織田信長は岐阜在城10年の間に、近江・伊勢・越前へと勢力を次々と広めて行きました。その後、安土に根拠地を移そうとし、天正4年(1576)に安土城の築城に着手しました。

その頃から美濃と京都との往来が盛んになり、呂久の渡しが交通の要衝として重視され始めました。

呂久の渡しは、信長の長子信忠が呂久に渡船を設け、村の諸役一切を免除したのが始めとされます。

それ以降、時の為政者から渡船に専念するよう諸役一切を免除されたと言われています。



## ろく 呂久の渡し

3/9

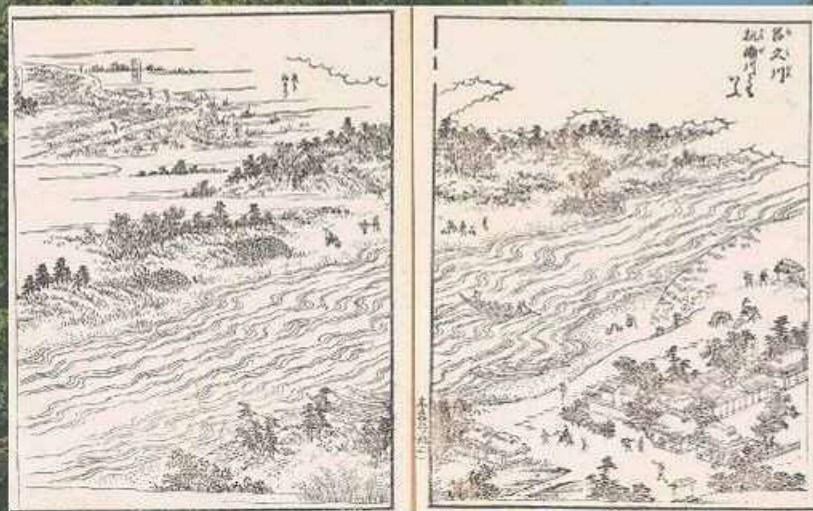


江戸時代 1610 年頃になると船頭が 13 軒になり、  
幕府は呂久村に船年寄りを村役員のほかにおきました。  
船年寄りは馬淵家の世襲となり、苗字帯刀を許され、渡船に関する一切の業務を  
掌っていました。船頭は常勤 8 名、助勤 7 名を有していました。  
この写真は今も残る馬淵家の長屋門です。



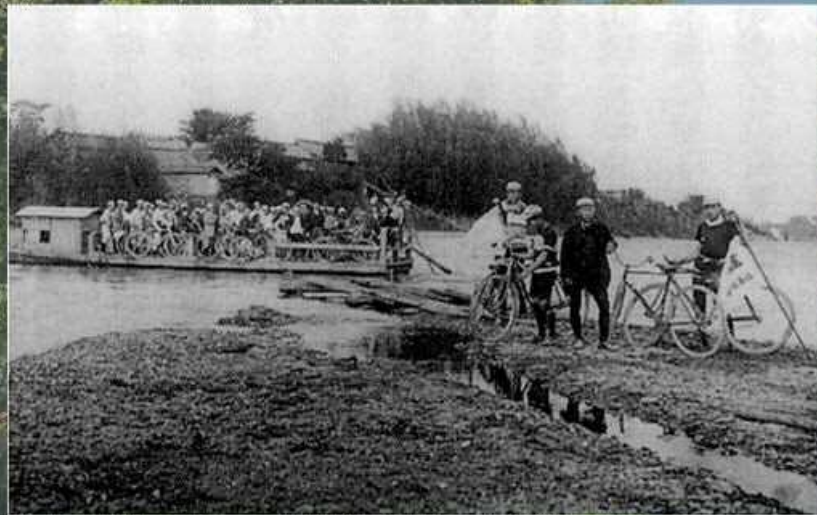
## ろく 呂久の渡し

4/9



水戸路名所図会

1806年に作られた旅行ガイドブック「水戸路名所図会」に、江戸時代後期の呂久川の渡しを紹介しています。渡し舟が描かれ、それを待つ人々も見られます。安全に川を渡るために浅瀬も通行できる船を工夫したりしていました。



北村皖庸氏（神戸町）提供

明治時代の後半も渡しを利用する荷車の通行が多くあり、  
架橋も検討されましたが、実現はしませんでした。  
この写真は、大正時代の渡船の様子です。



## るく 呂久の渡し

6 / 9



岡田式渡船のイメージ すなみ百話「呂久の渡し」より

大正9年になると、兩岸の堤防間にワイヤーロープを張り、滑車を取り付け、川の流れを利用して渡船する仕組み「岡田式渡船」が導入され、より多くの荷物や人を運べるようになりました。  
大正末の河川改修工事により、呂久の集落の東を流れるようになってからも、岡田式渡船が運航されてきました。



## るく 呂久の渡し

7 / 9



揖斐川を行き来する当時の農業従事者

河川改修以来、大水による洪水もなくなり呂久の人々の暮らしは一変しました。  
しかし、橋のない揖斐川を越えて農耕に従事する村人の苦勞は  
ひとしおではありませんでした。



## ろく 呂久の渡し

8 / 9



昭和 27 年完成の潜り橋

こうした不便さと危険を除去するために、昭和 27 年、平水位部分に鉄筋コンクリートの橋（通称：潜り橋）が開通しました。この橋の完成により、さまざまな思い出を残した呂久の渡しはその幕を閉じました。





# ろく 呂久の渡し

9 / 9



昭和 50 年に完成した現在の鷺田橋

現在の鷺田橋は、昭和 50 年 8 月に完成したものです。